

精道村の自然と暮らし

芦屋市の立地する場所は、大阪周辺の沖積地と六甲山麓の帯状の海岸の緩やかな傾斜地とが移り変わるところにあって、自然環境に恵まれた地形の変化の多い、交通の便利のよい土地に市域が広がっています。

明治以前までは、主として生業は農業と漁業や芦屋川の急流を利用した水車産業などでしたが、近代になって生活圏の拡大とともに、大都市の住宅地として繁栄することになりました。精道村時代の生活風俗や習慣や年中行事には、芦屋の土地を守り育ててきた近世のコミュニティーの特色が継承されています。



岩ヶ平丘陵農村風景 大正6年

「六甲の峯と武庫の海との中にはさまれた丘の裾野にも、住み古して10年に近づかんとする今、しみじみとその山、その海に愛を覚えて心の底から呼びかくる。」

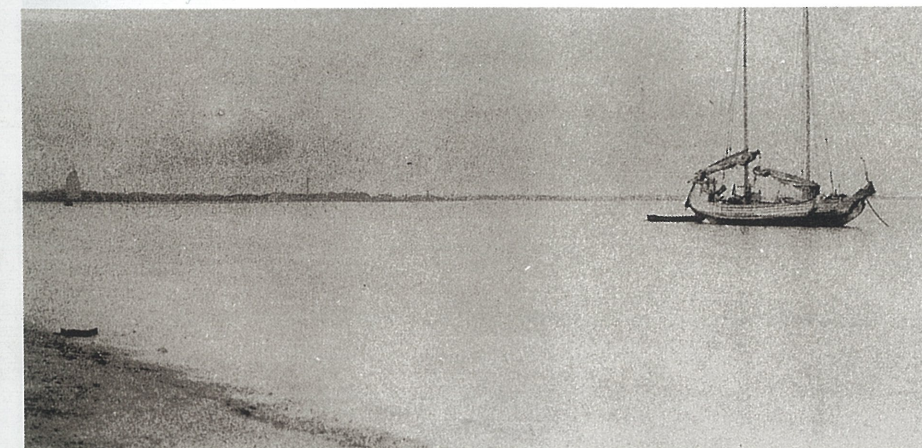
(児玉多歌緒 スケッチブック『山畑』から)



大正時代の芦屋浜いわし地引網風景



芦屋海岸漁獲の景 阪神沿線芦屋名所絵葉書



芦屋海岸の景 大正軒 芦屋名所絵葉書

芦屋浜風景

「とれとれのいわし」で親しまれた地引網は、2隻の漁船が沖合にて山形に分列進行して投網し、終われば岸に引き返し、轆轤(ろくろ)をもって網を引き揚げる方法でした。戦後の昭和25年ごろになると、漁獲高の向上を図って船曳網へと漁法が変化しました。

「昔は宮川の雑魚と云って京都あたりでは珍重されたものだそう。夜など漁夫の網を曳くホウホウという掛声が海の方から風につれて、わびしいしかしいかにもひなびたその響を村のずっと遠くの山手へまでも聞こえさせたものだが、この頃では静かな夜半でも無ければ建て詰ってきた人家のために聞くこともできなくなった。」

(『阪神沿線』昭和4年 富田碎花)



芦屋海岸 大正9年
漢人の浜の伝承で知られた白砂青松の芦屋浜の情景は、万葉のむかしから都人のあこがれの地。近代には、多くの文人墨客が訪れた。



芦屋浜 大正時代



芦屋浜で遊ぶ子どもたち 大正時代



芦屋川河口 「黄昏の海を見ていると、味のいい葡萄酒の匂ひがする。黄昏の松原を見ていると、紫色の絹の匂ひがする。」(詩人・柳澤健『芦屋風景』、大正8年から13年まで芦屋に住んだ)



昭和11年ごろの芦屋海岸と防潮堤



芦屋浜の春 大正時代

海水浴

関西で海水浴場が開設されたのは、打出浜が最初でした。明治39年、新聞社(大阪毎日新聞社)主催として紙上に打出海水浴場開設の社告が出たところ、南海電鉄が急拠大阪・浜寺に開設したといわれています。



大正時代中ごろの海水浴風景



昭和初期の海水浴場

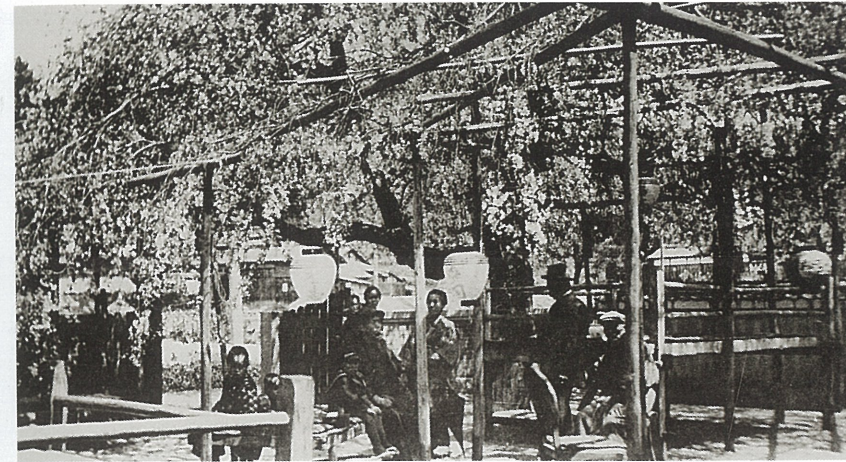


芦屋浜海水浴場のスナック 昭和12年

潮見桜 (汐見桜)

初代は、在原業平が、西山町の塩通山法恩寺内に植えたといわれています。

この写真の潮見桜は、3代目で、開森橋西詰に明治6年植えつがれ、京都の祇園ざくらのように美しく生長し、昭和初期まで、芦屋の名木として知られました。



潮見桜 大正10年ごろ

「精道村芦屋の汐見桜は、有名な沿道の名木であるが、昨年返り咲きが多かったのと虫害のため、大いに衰えて開花は、例年の半分位であるが、昨今見頃で、掛茶屋や出し店で賑っている」

(「西撰新報」大正13年(1924)4月11日)



大正時代の潮見桜

くろがねもちの木

くろがねもちは、モチノキ科の常緑樹で、普通庭木として栽培され、その枝葉が黒みを帯びているところから「くろがねもち」と呼ばれた。西山町旧法恩寺にあった「くろがねもちの木」は、根回り約4.9メートル、地上1.5メートルの幹回り約3.5メートル、高さ20メートルで、くろがねもちの巨樹としては松江城のものとともに全国的に有名だった。昭和9年、兵庫県の天然記念物に指定されたが、老衰と害虫に侵され、害虫駆除に努めたが、その効果もなく枯死した。33年4月天然記念物指定解除。



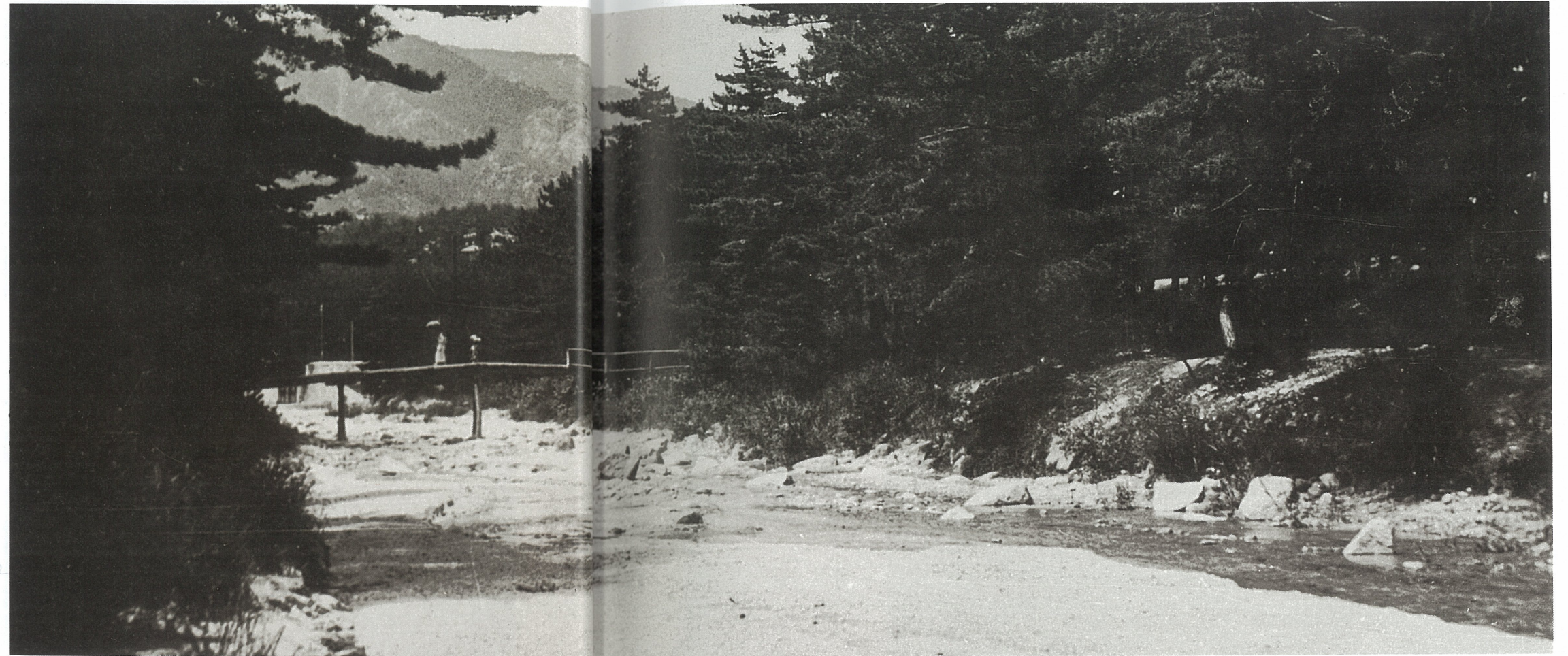
くろがねもちの木

川と橋の風景

川床が川沿の土地より数メートル高い芦屋川畔は、砂礫(されき)の多い土壌で、農耕地としては恵まれず、明治以前は開発に大きな支障となっていました。

しかし、近代都市の住宅地としてみると、土地は高く乾燥し、地下水は清浄であり、堤防上の松の緑と地表水の織りなす風致は美しく、しばしば近代文学の名作の舞台にもなりました。

昭和初期の芦屋川風景 月若橋(ベコベコ橋)、どんどん橋ともいう。阪急電車が開通(大正9年)する前からあったが、幅は1メートルほどで、舟の底板に似た木製で、歩くたびにきしむ音からこのように呼ばれた。



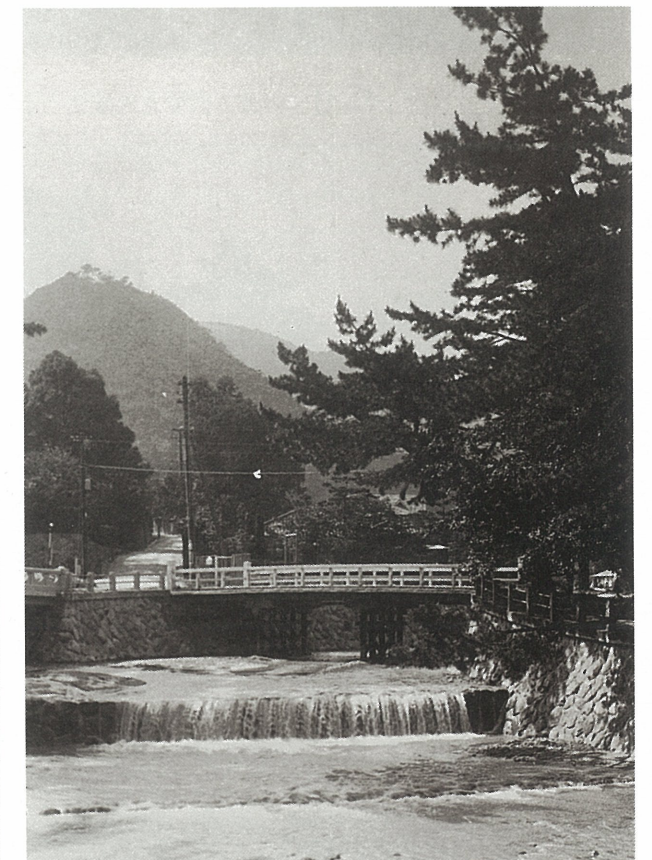
月若橋 芦屋の伝説・謡曲『藤栄』にみえる月若丸にちなむ。



大正初期の芦屋川 往時は川幅が100メートル以上あった。



大正初期の芦屋川改修工事風景 この写真からも、芦屋川の川幅の広さがうかがえる。



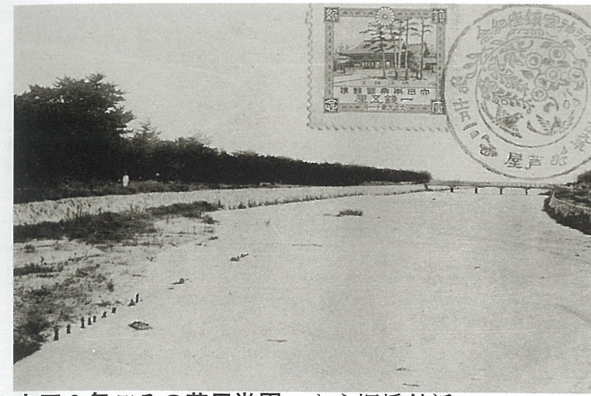
大僧橋(左)と城山橋(中央) 城山橋は、昭和13年の阪神大水害で流失し、現在はない。



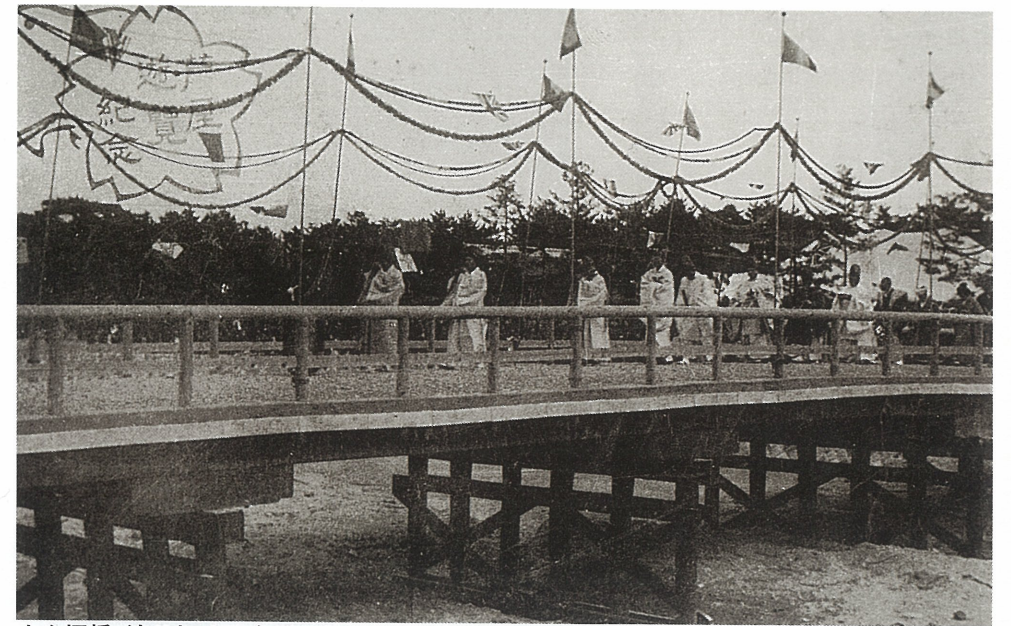
当時の珍しいスナップ写真 城山橋は開森橋の北、現在の大僧橋北詰から芦屋川東端へ架かっていた(昭和初期)。



昭和12年ごろの芦屋川上流の風景



大正9年ごろの芦屋遊園 ぬえ塚橋付近



ぬえ塚橋 渡り初め 大正6年
当時は親・子・孫の3代夫婦のそろった家の人が渡り初めを行った。



防潮堤ができた当時の宮川河口 昭和12年ごろ
左は潮風橋。



潮風橋にて 昭和12年5月架橋

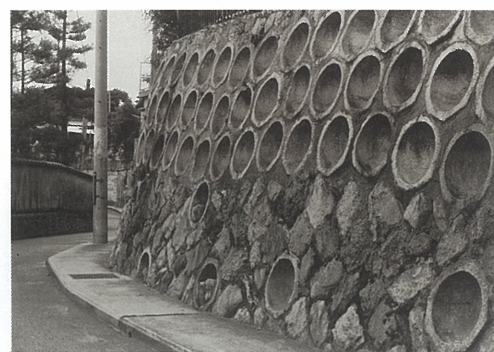
水車

江戸時代から、芦屋川の急流を利用して精米や油搾りのために、最盛期は、十数台の水車が建設されるなど、水車産業が盛んでした。

緑とオゾンにつつまれた水車谷や城山の南麓、静かな田園風景のなかに水車がまわる芦屋地方も、大正期以後、住宅地化がすすみ、水車の姿も消え去りました。



芦屋川に水車がまわっていたころの樋(とゆ) 城山のふもと(大正9年)



石垣に転用された水車臼(山芦屋町)
かつて、西芦屋、東芦屋、三条、打出などで水車でついた小麦粉を利用したそうめんづくりが盛んであった。いまは、そうめんづくり唄や芦屋の水車にまつわる悲恋物語「金兵衛ぐるま、焼けぐるま」の伝説、民家の石垣に残る100余の石臼などに、そのおもかげを伝えている。

打出西国街道

打出西国街道は、生きている道の歴史です。京都からのコースは、西宮で西に向かい、春日町に入ります。道端には、道標や石仏があり、当時の面影を伝えていました。道はここから金津山の南を通り西国橋を渡り、茶屋之町を直進して国道2号に出る本街道と、国道43号に沿

う浜街道にわかれ、神戸市に入りました。

昭和46年ごろから始まった区画整理事業で、道幅を広げ2車線と歩道がつくられ、鳴尾御影線の延長として大きく変容しました。



打出西国街道のおもかげ 昭和53年撮影



左 中山 右 西宮道
左 甲山道 右 中山
左 荒神 右 妙見山
と刻まれた道標や、一石五輪塔・定印弥陀などの石造品。
昭和53年撮影

だんじり

戦前まで、芦屋市内には、打出・三条・津知・山芦屋・東芦屋・西芦屋・茶屋芦屋・浜芦屋と8基のだんじりがありました。

三条、津知のだんじりは、古くは、保久良神社の氏子として、5月13、14日の祭りに曳いていました。打出は、10月17日の打出天神社の祭りに、その他の5基は、10月15、16日の芦屋神社の祭りに巡行が行われました。



西之町だんじり
昭和7年ごろ



西之町だんじり 昭和8年10月 芦屋天神社（現芦屋神社）秋祭り

婚礼

花嫁が嫁ぐ家の前。親せきや村の人びとの前で盛大なお披露目とお祝い。十荷余の嫁入り道具がかつがれ「長持音頭」が唄われます。かつぐ人は唄に合わせて「ヨーイショ」のかけ声で杖をたくみにあやつり肩を入れ替えて荷を運んでいきます。



嫁入り道具 お披露目で、部屋中に飾られた嫁入り衣裳・家具など。



嫁入りのようす 現在の浜芦屋町付近 大正時代。



嫁入りのようす 現在の三条町付近 長持音頭が唄われる。嫁入りのようす 現在の三条町付近 大正末期。



人びとのおうす



大正14年ごろの子どもの風俗



大正時代の女性の服装



大正10年ごろの女学生の服装



大正10年ごろの女学生の服装



大正時代の男性の服装



大正10年ごろの女性の髪型



芦屋川散策 大正時代の芦屋川は、整備された川床道があり、ゴロゴロした花崗岩の川床も散策の場であった。



月若橋(ベコベコ橋) 当時芦屋川には、4ヶ所しか橋がなくて、このあたりは、人びとの憩いの場となった(大正10年ごろ)。



明治時代の巨石運搬

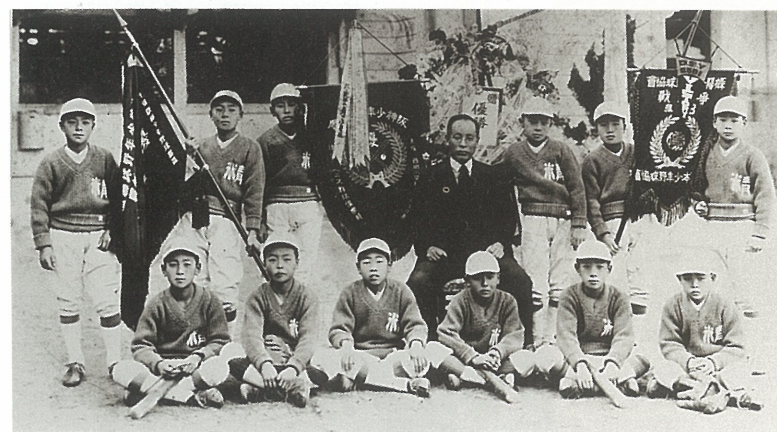


明治末期の農作業のようす

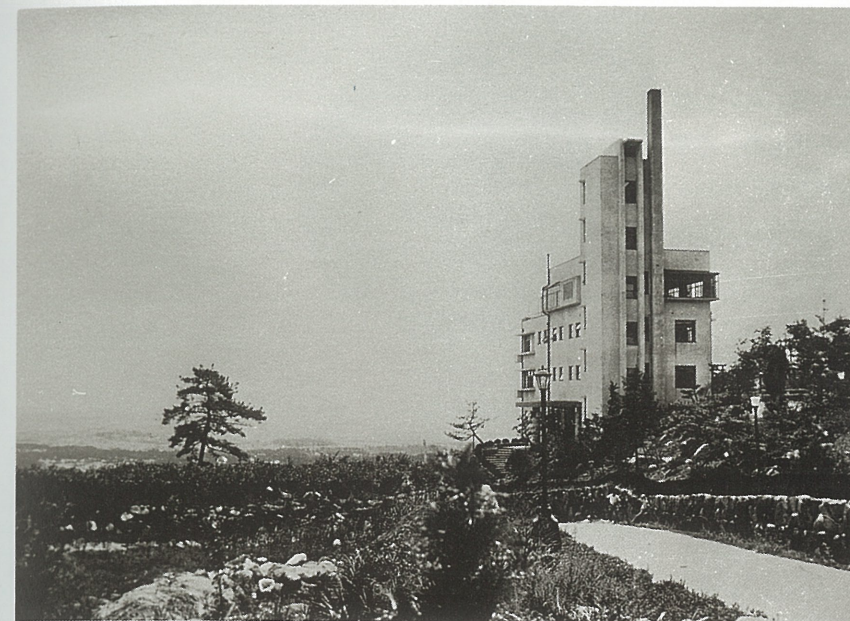


本通り商店街付近 昭和12年ごろ

本通り商店街は、歴史も古く、明治時代の車道に沿って位置し、阪神電車の開通などで発展してきた。大正12年ごろには「本通り商店街」の名称をとるようになった。



阪神少年野球大会で優勝した精道小野球チーム 昭和6年



建設当時の国際ホテル

六麓荘国際ホテル

国際ホテルは、茅渟(ちぬ)の海を見下ろし、四季を通じて風光明媚、しかも芦屋駅から十数分の便利な立地ということで、昭和12年9月六麓荘に建設されました。戦時中は、企業の研究室として使用されたりもしましたが、戦後は米軍に接収され、外国人や一流財界人が泊まるホテルとして有名でした。

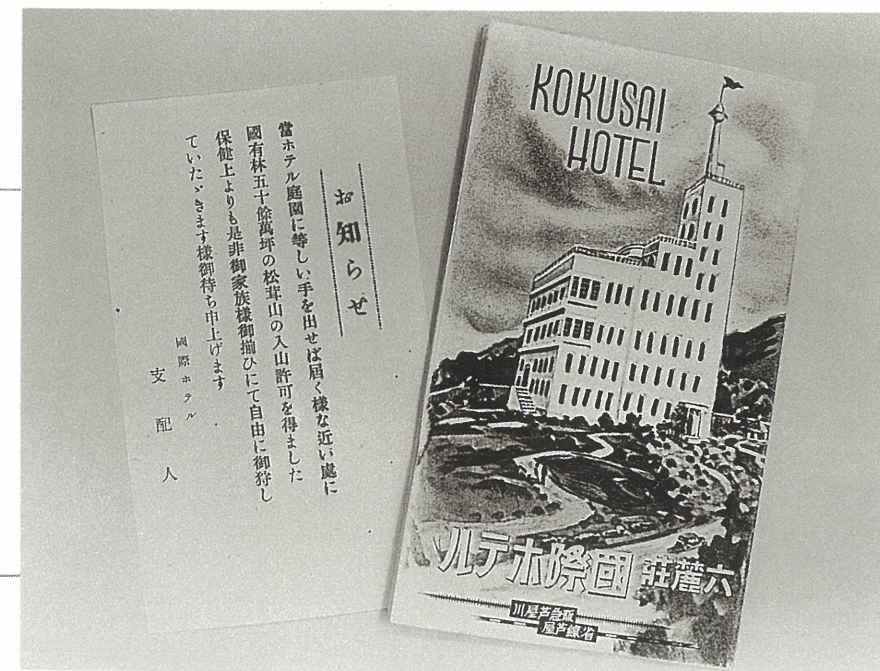
御宿泊料

一、洋室(御一名様)
金八圓一拾貳圓

一、洋室(専用浴室付)
御一名様
金拾七圓一貳拾圓

一、各室御二人の場合は五割増を頂戴致します

(パンフレットから)



オープン当時のパンフレット



食堂

御食事料

一、朝食 金壹圓五拾錢
(七時ヨリ)

一、晝食 金貳圓
(十二時ヨリ)

一、夕食 金貳圓五拾錢
(六時ヨリ)

(パンフレットから)

ロックガーデン

ロックガーデンの名称は、「六甲の一木一草、ないしは一握一粒の土地砂は、すべて私たちの隣人である」と言った登山家藤木九三などの紹介によります。

ロックガーデンは、芦屋川と魚屋道にはさまれ、南は高座の滝付近から、北は荒地山までの一帯の地域で、花崗岩が特異な奇岩の様相を呈し、岩登りのゲレンデとしてハイカラ好みの人たちに親しまれてきました。



バドミントンスタイル（ロックガーデン中央稜）
ヨーロッパアルプスの登山風俗をまねて、チョッキ・長ズボンの服装（人物右）が大正から昭和初期に流行した（昭和4年）。

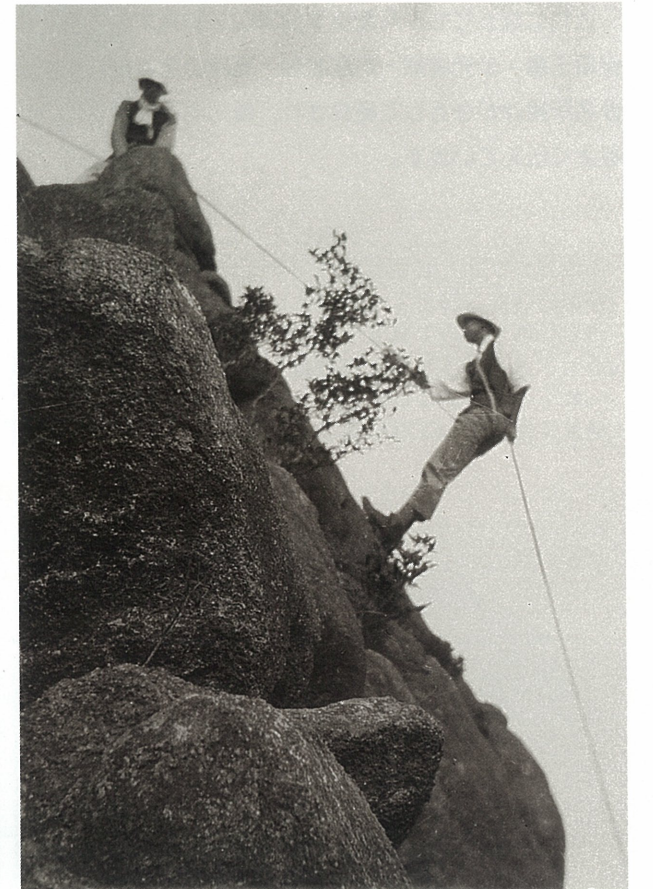


B懸垂岩
ザイルを使って降りることを懸垂と呼ぶことからその名がついた（昭和5年）。



ロック・クライミングクラブ発祥（1924）の地としてその功をたたえる藤木九三のレリーフ（高座の滝）

イタリアンリッジ（高座川の西側、奥の滝付近）。
マッターホーンのイタリア側からの形に似ているのでその名がつき親しまれた（昭和8年）。



荒地山の岩場



岩登り風俗（B懸垂岩上）
ニッカーボッカーにネイルドブーツ（人物右）、スカルベチと呼ばれる麻底の岩登り専用靴をはいている（人物左）。
ザイルは本麻製である（昭和5年）。

絵はがきに見る芦屋の名所旧跡

江戸時代から芦屋の里は、名所旧跡が多く地誌にしばしばとりあげられてきました。

近代になっても、芦屋浜や金津山・猿丸太夫古塔・阿保親王墓・公光屋敷・芦屋遊園・高座の滝など10景以上が名所絵はがきとして紹介され、風光明媚な芦屋の情景をよく伝えています。



伝猿丸太夫之墓
芦屋神社境内には、猿丸太夫之墓と伝える宝塔がある。鎌倉時代の石造品とされているが刻銘はない。

猿丸太夫古塔
(所在地：内境宮)



芦屋浜風景

白砂青松の芦屋地方は、古来「漢人(からひと)の浜」と呼ばれ、文化的・経済的に有力であった古代の南部朝鮮百済系の渡来人によって繁栄したと伝えている。



弁天岩付近の景観
六甲山中の巨石・巨木はしばしば信仰の対象にされ、近くのカキ切り岩の伝説とともに、水神の住み家と信じられ、雨乞いの霊場であった。

芦屋川上流財天大岩景



芦屋城山 大正時代

明治・大正時代の地誌には、すでに城山南麓に分布する6世紀～7世紀ころの古墳時代の横穴石室が紹介されていて、「芦屋城山の岩屋」や「奥津城」などと記されている。写真の右上は、石室内のようすで、下は、天井石の大きさを置かれている帽子で見せている。

芦屋城山



打出阿保親王墓

親王さんの森と呼ばれた阿保親王塚正面。左右の石灯籠は、山口県毛利家の寄進といわれている。

The Akoshinno Tomi uchide.

打出阿保親王塚



芦屋神社風景

むかしから天神さんのつつじで親しまれた芦屋神社は、阪神間屈指の名勝地で早くから阪神六景のひとつに選ばれていた。神社へ向かう参道周辺は、赤松の原生林やみかん畑などもあり、周囲の山や南への眺望に優れていた。

芦屋神社